

香川大学研究シーズの紹介 (第49回)

沖縄自生種との交配で ブドウの醸造用新品種「香大農R-1」育成

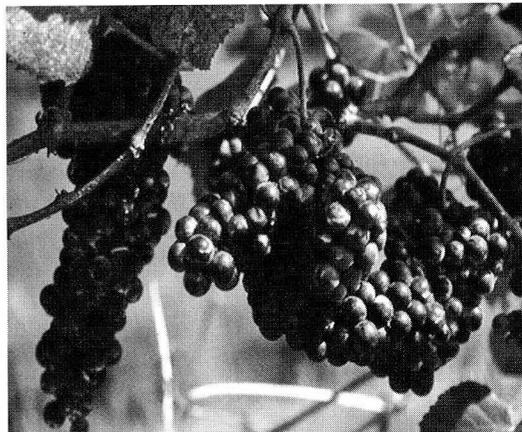
農学部 応用生物科学科 教授 望岡亮介

研究シーズの概要

果樹の栽培技術の開発、新品種の育成、遺伝資源の園芸学的利用を領域とする果樹園芸学のうち、日本原産野生ブドウの遺伝資源収集・利用が望岡研究室のメインテーマ。ここから2006年、農林水産省に種苗登録されたワイン用新品種「香大農R-1」が生まれました。

瀬戸内海性気候のように熱帯夜の続く地域で栽培されるブドウは、収穫時期になっても果皮が十分に着色しない着色障害（赤熱れ）が発生しやすくワイン製造に不向きとされていました。そこで、日本に分布する7種8変種の野生ブドウのうち、種と皮ばかりですが、ポリフェノール、アントシアニンを多く含む高温でも着色に優れている沖縄自生のリュウキュウガネブに注目。これを育種親に用いて栽培種のマスカット・オブ・アレキサンドリアと交配させた醸造用新品種の育成に成功しました。

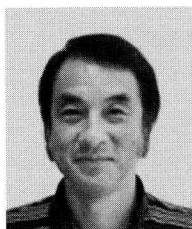
この研究開発は1999年、香川大学と香川県、ワインメーカーとの共同でスタート。交配して得られた約1000粒の種の中から選抜して生き残った1系統を挿し木や接ぎ木をして新品種として確立しました。「香大農R-1」は香川大学農学部附属農場のほか香川県農業試験場、委託農家での試験栽培を行っており収量も多く栽培も簡単との評価を得ています。またこのブドウから造ったワインは、濃厚な色合いで渋みも少なくノド越しのよいフルーティなものに仕上がりに「ソヴァージュヌ・サヴルーズ」(芳しき野生の乙女)の商標を香川大学が持っており大学発のブランド・ワインとしての発展が期待されています。



「利用が見込まれる分野」

・果樹・樹園・施設園芸業、食料品製造業、飼料・有機質肥料、飲食品小売業

研究者プロフィール



望岡 亮介 / モチオカ リョウスケ
 メールアドレス mochioka@ag.kagawa-u.ac.jp
 所属学部等 農学部
 所属専攻 応用生物科学科
 職位 教授
 学位 博士(農学)
 研究キーワード 野生ブドウ、遺伝資源、機能性成分